夢よ、甦れ

―もう一つの学ぶ道―

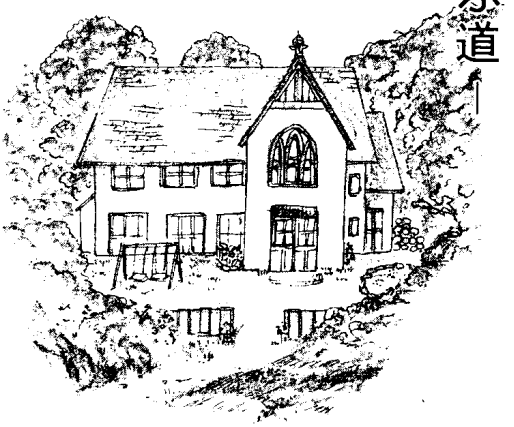
下谷竹三

近代文藝社

夢よ、甦れ

―もう一つの学ぶ道―

下谷竹三



近代文藝社

夢(ゆめ)よ、甦(よみがえ)れ
——もう一つの学ぶ道——

1995年2月28日　第1刷

著　者　下谷　竹三（したや　たけぞう）
発行者　福澤　英敏
発　行　㈱近代文藝社
〒112 東京都文京区目白台2-13-2
(03)3942-0869　Fax(03)3943-1232
印　刷　信毎書籍印刷株式会社
製　本　小泉製本所
©Takezou Shitaya 1995 Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります
ISBN 4-7733-3547-5　C0095
落丁・乱丁本はお取り替えいたします

まえがき

子供が駄目になったと言われだしたのは、いつ頃からだったでしょう。その内未熟な母親が、そして存在感のない父親が、やる気のない教師が、次々に指弾されてきました。今では人間関係をどう作っていくかで、問題山積の話になっています。遊べない子と遊び型非行、出社拒否社員と猛烈社員、最高学府で遊びと漫画学習にどっぷり漬かり、誰かの脛を齧る学生たち等など。

それでは嘗てはどうだったのでしょうか。そこには問題はなかったのでしょうか。過去を振り返ってみると、それぞれの時代はそれぞれの課題があったのです。その課題を誤解した答案を書いてしまった、そのために一層、今の青年は難しい課題を背負わされた、そんな気がしてなりません。

この自伝を書き上げてみて、人は青年になるのではない、青年を発見するのだということが何とか分かりました。これは青年にだけ当てはまるものではありませんが、青年期が最も難しい人生の役割であるだけに、役割発見の難しさが鋭くされるのだと思います。そうした意味で人は教師の仕事に就くだけでは、教師にはなれないというのも当然です。教

師を発見するのです。人はどのようにして教師という、意義深い職を求めるのでしょう。何のために教え、学ぶのですか。遊びは学ぶ上でどんな意義があるのですか。こう問われて、学者の助けを借りずに、教師は答えなくてはならない時代になったのです。これらのことを一つ一つ確かめながら書いてみました。

育児も教育もひどく難しい時代になりました。ここに書かれていることが、広く青年の成長に関心ある人の、お役に立っていただければと思い、書き上げてみました。感想をお寄せ下さい。最後に近代文芸社の芳村みどりさんには、特にお世話になりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目

次

路地裏のモザイク模様 …… 7
ほろ苦い体験学習 …… 23
消えた下町のメルヘン …… 35
学ぶことって何だろう …… 49
エンジョイ！　首都「文化」生活 …… 81
人はパンのみにて生くるに非ず …… 93
陽春の中の冷気 …… 109
「狭き門」を探しあぐねて …… 125
職業としての教育 …… 147
青年よ　清冽な流れを汲め …… 169

夢よ、甦れ

――もう一つの学ぶ道――

路地裏のモザイク模様

それは多分四、五歳より後のことではないと思う。寝入り際に母の口から、十八番の一つになっている「石童丸」を聞かされた。子供心にもそれは親子の哀切の話らしいと耳を傾けていた。御詠歌さながらの哀調の中に浸り、安心して眠りの世界に誘われていった。目覚めると唐紙の隙間から、仕事部屋の光が漏れ、洋服職人である父一人の仕事姿が目に入る。〈それではあの話は昨夜寝る時のことだったのか。すると昼寝から目覚めたのか〉と気付く。気が付くと大抵は隣で父を助けて働く母の姿がなく、狭い家のどこにもいる気配がしない。外はすっかり日が落ちているのに気付いた私は、何時迄待っていても現れない母が、もう帰って来ないのではと思い始めた。そうだ、何か事故に遇ったのだ、そうに違いない。突然そんな心配が胸に広がった。その時恐怖に怯えた小さな魂の自画像を、小学校時代に見たムンクの『叫び』の画に見付けた。何故そんな恐れが？　その理由は追い追い分かってもらえると思う。母は仕立てた服を届けに市電に乗って出て行ったのであっ

た。その日は父母と兄姉との五人の遅い夕食になった。遙かな幼き日の原風景である。

私の生まれたのは昭和六年（一九三一年）で、中国侵略の発端、満州事変が始まった年である。赤穂浪士の討ち入りで知られた江戸本所松坂町は、私の生まれた町の近くなのだが、物心付いた幼年期の思い出は、既に地図上から消された下谷区竹町（現台東区台東）であり、往時の家並みの多くを何とか今も留めている。ここが心の故郷である。路地の一番奥、五軒ある家作の中で大分造作の落ちる、それは薄暗い借家だった。日当たりの悪い二階屋の、入ったところが広い土間で、階下が二部屋と台所、さすがに東京である。その借家にも昔日のガス台が付いていた。二階は六畳二間で、物干し場の傷みがひどく、十分に注意しないと踏み外す心配があった。この干し場に母が掛布団を干すことはあっても敷布団は稀であった。それらは長方形の小布を寄せ集め、実に百余枚もが縫い合わされ一枚の布地となった、巨大なパッチワークである。洋服問屋から貰って来た台紙に貼りつけられた洋服地の見本、その小布を一枚一枚剝がし集大成した、それは語るも涙のリサイクル作品である。この労作を完成させた母の心中は、この作品だけは人目に曝すのが辛かったらしい。その敷布団に春夏秋冬、敷布なるものの使われることもなかった。

少し強い雨が続くと、直に雫の落ちる音が天井裏を叩く。次第に速くなる音に落ち着いてはいられず、すぐに母を助けて鍋やバケツを幾つも動員して、その底に雑巾や襤褸（ボロ）を敷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いた。湿けた一階の奥の間の畳から茸が生えて等が時に起こった、そんな住環境の良くない住まいであった。何故か盛られた茶椀の中から、あぶら虫と呼んでいたゴキブリの足や体が出ることが一再ならずあった。兄が「平気平気、栄養剤、栄養剤だ」と言う。仕方なくそっと口に入れたご飯の味は、特に変わってはいなかった。

その日暮らしの東京下町の職人の子供には　洗い張り、布団の打ち返しの手伝い、炭を適度の長さに切る、それを五徳に入れての火起こしなど、今では子供にやらせたくても出来ない家事は数知れない。特に戦時期には仕事は一層増えた。

父は芸事と映画を好み、その銀幕に子供たちをお付き合いさせた。私は途中よく寝てしまった。一人でどこに行ったのか、夜の路地を帰って来る父が鼻歌を歌っていた。新内、常盤津、長唄、端唄、清元、都々逸、どこかで三味線でも弾いたか、そんな手振りの時もあった。若い時代に人並みの放蕩家と言われたそうだが、全て玄人筋とのお座敷でのことだったから、父の女性問題で嫌な記憶はない。

夕方家族で銭湯に行く。頃合を見計らって声がかかって来る。「もう出るよっ」の声。出入口で一緒になり、偶(たま)には買物がてら、近くの商店街を冷やかして歩く。都心の空に雁の群れを見つけるのも、珍しいことではなく、母がハスキーな声で歌い出すことがある。自然に口を合わせて、雁を月明かりの天空に見送る。

雁がわたる　鳴いてわたる　鳴くはなげきか　喜びか　月のさやかな秋の夜
棹になり　かぎになり　わたる雁　おもしろや

母の小学校三年に学んだもので「磨かずば　玉も鏡も　なにかせん　学びの道も　かくこそありけれ」（東京女子師範学校校歌）や「三才女」など、明治の唱歌をよく歌った。演劇の好きな母を、娘同様に可愛がった大伯母一家が歌舞伎通で、両親を誘っていた。かくて両親の精神的絆は、映画や舞台の趣味に何とか残されていた。この大伯母の家に時折乗物で出掛けた。そこで話題が弾み、耳に挟む大人たちの言葉は、カゴツルベ、モドリバシ、セキノト、ミチトセ（「籠釣瓶」「戻橋」「関扉」「三千歳」）だとか、六代目がどうの等であった。娯楽への出費は生活費を一層圧迫していた。

兄は殊の外軽演劇に熱を上げた。なにしろ浅草まで徒歩圏内、両親公認の娯楽である。機械ものと遊びにかけて才があり、遊び仲間のカリスマであった。手製のカメラ、自作シナリオで三五ミリの映写機のフィルムを紙に一齣一齣、と描き、ギャングエイジ連を怪しげな夢の世界に導く。自作「当てむき」大会や偽札作りをやって、幼年の崇拝者にありもしない商品を買いに走らせる。こんなことは朝飯前、歌謡漫談の四人組の台詞をすっかり覚えてその替え歌を作るというご丁寧さで、姉も私も自然と覚え込んでしまった。『ベア

トリ妲ちゃん』や『小唄コロッケ』は我が家の愛唱歌であったが、中でも母と兄ご推薦となったのは、

東京で繁華な浅草は　雷門　仲見世　浅草寺　鳩ポッポ豆うるお婆さん

と浅草が歌い込まれた『東京節』、別名『パイノパイ』である。

ところがどんなルートからか、姉は洋楽派に鞍替えしていた。よくアリアやイタリア民謡、シューベルトの歌曲に賛美歌まで歌っていた。かくて娯楽と音楽の世界に関しては雑種文化の坩堝（るつぼ）の中に、マウスとして飼育されてしまった。

奉公中の兄が釣りに連れて行ってやるの言葉を信じて、小学生の姉と私は千葉県へ向かった。初めての遠出の釣り、然し当日一匹も釣れない。足取り重く帰りの駅に着いてみると、ポケットを探して首を傾げている兄が愕然として、「電車賃が無い！」とのたもうのだ。釣り道具屋で買い過ぎたらしい。暮れゆく道を三人でとぼとぼ歩き、遠回りをする元気もなく、大川端の鉄橋を電車の来るのを心配しながら、枕木の上に足を乗せた。映画『路傍の石』の吾一少年が、橋上の線路にぶら下がる場面がダブり、橋下の流れを見ないように渡った。こんな失敗はよくある兄であった。お陰で幼少年期の記憶は消しがたい。

六年遅れて弟が生まれた。これ迄は三人の子を世間の親並みに可愛がることのなく、不安と恐怖感を与えてきた父が、突如大変身した。新入りを信じられない程に可愛がった。私もこの不思議な光景に当惑していた。そのため、例えば母のこんなやりとりを気にしていたのだと思う。

或る夏の日、風呂から帰って来た母が言う。

「今日も余所の人に言われたよ。可愛いお嬢さんです……あーら、坊っちゃんですか。可愛らしいですねって」

もちろん弟のことだ。これで三回目だ。思わず問い掛ける。

「じゃ、ボクはなんて言われていた？」

と。居候の叔母が引き取って即座に答えた。

「竹三の時はね、叔母さん、銭湯には人間を連れて来てって。ハハハハハ」

この叔母の辛口には何時も悩まされていた。事実猿のような顔の子供だったのである。

私は回り道をして三十過ぎに教師になったのであるが、よく生徒にこう言われた。

「先生は良い先生だね」

何か魂胆があるなと警戒する。

「そんなこと皆知っている学校の常識だよ。遅れてるんじゃないか」

「そう。その常識はね、良いは良いでも首から上がないと、もっと良い先生！」
どーっと歓声。そこで思いついた叔母の毒舌を逆手に使う。
「そうだ。首から上は猿の味噌漬けクラスだからなー」
「うまーい！　ぴったり」という声で点数を稼ぎ、これでやっと元を取ったと嘗ての日を思い返していた。ここ迄引き摺って来たあの不安の原風景の説明をここでしよう。
それは夕食の時に起こった。何時もながら父の左隣の席には兄も姉も着かない。右隣は母の指定席である。その恐怖の席について暫くして、私の茶碗は、いや右手に握った箸と一緒に、丸ごと吹っ飛んでしまった。父の手が激しく私の手首を打ったからだ。何故？これが分からない。母は慌てて「泣くんじゃないよ」と口に人差し指。却って私は激しく泣き出し慌てて何とか止めようと、両手を使って両唇を摘んだ。その口から「うーん」という、泣くとも唸るとも言えない声が、止めども止めども突いて出て来る。その声にまた悲しくなる。兄も姉も触らぬ神に祟りなし、剣呑剣呑と素知らぬ顔。では何故そんなひどいことを？　多分箸の持ち方が悪かったか、一口目におかずから食べたのか、或いはこぼしながらの姿を見ていられなかったのか、そのどれかであったろう。泣けばどうなるか、ただそればかりの心配の時間だった。何度こうした箸探しをしたことだろう。
又こんなこともあった。兄が玄関先で友達と将棋をしていた。楽しい縁台のへぼ将棋で

ある。そこへ父が帰って来た。と、じっと立ち止まって見ている。もちろん我々兄弟は体がかたーくなっている。突然将棋盤がすっ飛ばされた。勿論父によって。友だちは逃げ帰ってしまう。何故こんなことが？　後年に母から聞いたのであるが、父が小学生の頃プロに誘われる腕前だったのだと。その時になってハタとこう推測して納得することが出来た。

〈俺の血を引いたヤツが何故にこんなくだらん手を打つのか！〉と。そしてすぐに堪忍袋の緒が切れたのだろう。幾つになっても王将と金銀だけの父に勝てなかったし、何人もの挑戦者が勝利目前のご満悦の父の面前で、駒を投げて帰って行った。その父に何かで叱られ、「何！」といって仕事台の向こうで立ち上がった姿に、慌てて後退りしてその儘階段から落ちたことがある。しまったとすぐ階段を駆け降りて、「おい竹三、大丈夫か。傷は浅いぞ、しっかりしろ」とか何とか言うのが親である筈なのに。信じ難いことだが、その時弁慶少しも慌てず騒がずで、まるで何事もなかったように「平常心」で仕事を続けていたのである。このように一事が万事、世間の常識の枠にはまらない親だった。そこで冒頭に紹介した父とだけの夜は、恐怖は不安と重なりあって、涙ぐんでしまったのである。

その父に纏わる極秘物語を、母から聞かされ、父を除いて全員笑いが止まらなかったことがある。題して「電気メーター異変」。誰かに聞いたのか又自分で考えたのか、父が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com